社団法人
俳人協會々報

1974年
12月
No. 59

俳句文学館用地決定す
―新宿区百人町―

昭和四九年七月協会報第五七号にて既報のように、文学館建設用地は―中央線沿線に約三百坪の土地を取得すべき方向で進められておりましたが、紆余曲折の結果、新宿区百人町三ノ二八ノ一二の約一三六坪の土地を俳句文学館建設敷地とすべく大蔵省に対し払下申請書を提出することに決定致しました。

報告としては以上で完了したわけです。中央線沿線の土地（高円寺南町二五番地）約三百坪から、百人町土地へと変更したことについて疑問を持たれる方も多いと思われますので、その間の事情をかいつまんで記述致します。高円寺南町の土地を取得するためには、協会より代替地（公務員宿舎建設用地）の提供が条件となっておりました。総会における角川氏の説明では某篤志家が土地を提供するという話でしたが、その某篤志家とは角川氏本人であったわけです。角川氏の所有する土地は牛久沼周辺の二筆の土地合計千八百坪と高幡不動に所在する土地三千坪とがあります。協会が補助金申請のために関係官庁に提出した書類は高幡不動の土地に建設する条件にて設計計画書を作成、高円寺の土地との交換が成立した段階で、計画変更書を出し、実際の実施設計に移行しようと見込んでたわけです。高幡不動の土地は協会へ提供していただくには困難な状況にありましたので、牛久沼周辺の土地を提供していただき、代替資産として適状かどうかを水戸財務局に提示したわけであります。当地は学園建設都市に近いため、異常な開発ブームに乗り地価が暴騰していた地域でありました、従いまして当初の財務局における鑑定評価見込みは、評価差もすくなく適地であると予測されましたが、条件としては二筆に離れている土地を何等かの方法で換地により一つの場所にまとめ、建築効率を上げて欲しいという要請でありました。開発ブームを招来している真唯中において、村井委員の折衝が再三再四にわたり続けられました。地元選出代議士の力をかり、村関係者の仲介により多くの手を打ちましたが、ブームに湧く土地所有者の強気を反映し、換地工作は難行を極めました。しかし努力の甲斐あって一方の隣接地への交換による取りまとめの成立がなされようとした直後、同地区が都市開発条令による市街化調整区域に指定され、財務局における鑑定評価の見通しが行なわれ、交換土地との評価差がはなはだしく大きくなり、代替資産としての適格性を欠き、収納取り消しの通告を受けたのであった。

昭和四九会計年度に入るに及び、文部省及び船舶振興会から建築着手報告の提出を求められるに到り、工事着工延期願いを再三提出し、その都度建設計画の変更手続を作成しては着手遅延の理由書を提出して参りました。第一四半期、第二四半期の経過に伴い、建設実地報告の提出を再三再四求められましても未着手では報告の提出しようもなく誠に困惑するばかりで、ついには補助金の決定を受けながら消化不可能の判定を下され、返納せざるを得ぬ最悪の実態を招来しかねる状態にまで到りました。連日にあたる文化庁、船舶振興会等よりの呼び出しのため村井委員は協会日常業務も手につかぬ状況でありました。

さて、そこに及んで角川委員長も再度高幡不動所在の土地を協会に提供するという申し出があり、その旨財務局長に伝へ、同土地の交換適状の有無についての検討に入りました。財務当局もその土地の広さからいい、公務員宿舎の建築用地として適格性を認めましたが、当地は日野市に所在するため、市当局との打合せにおいて同市の開発指導基準がきわめてきびしく、道路、水道、排水、公園用地の提供開発分担金の諸条件もあり、また同土地は傾斜面が相当多いため、その整地に対する予算が多額を要する等の理由で交換が不成立となったわけであります。そこにおいて計画を元に戻し高幡不動の土地に文学館建設を行なうべく決定、日野市都市開発条令の研究と、建築認可申請提出後の許可期間の打合せ、下水道排水に伴う、水利組合との了解の取り付け等、補助金消化期限が切迫しているので、

一週間の期限付きで建築可能の有無について検討を行いましたが、時間的に補助金消化不可能との結論に達し、高幡不動に建築することを断念、十月十九日の委員会で水田顧問の絶大なる協力のおかげで財務局より九月の提示のありました前記百人町の土地を文学館建設用地として有償払下げを受けるべく申請を提出した次第であります。その資金については高幡不動の土地を角川委員長より当協会が提供を受け将来それを処分して当てる予定でありますが、その間の利息支払資金について協会としては考えねばならぬ状況であります。度重なる計画変更に伴い建設施行計画案の書き直し、工事積算表の改訂、監督庁及び船舶振興会への申し開き、工事着手遅延による理由書の作成、念書の差し入れ等事務当局としてはこの二年間追われ通しで、一般事務処理につきまして会員諸兄に多大なる御迷惑をかけておりましたが、以上の理由によりますので何分の御寛恕賜わり度く存じます。

（松崎鉄之介）

第十三回全国俳句大会

―応募一万六千余　参会者六百余名―

当協会主催、朝日新聞社後援による全国俳句大会は、昭和四十九年九月七日（土）東京有楽町の朝日新聞大ホールで行われた。参会者六百余名、定刻一時、岡田日郎幹事司会のもとに、まず秋元不死男副会長が開会の挨拶に立つ。「御承知の通り、俳人協会は、伝統を守り、そして現代俳句を押し進めてゆく主張のもとにある。この全国俳句大会に寄せる作品も、立派に伝統を守りながら、新しい俳句を創りつつある。又俳人協会は、この種の大会の元祖であり、その故にこの大会には、当然貫禄がなければならず、かつ責任がなければならない。その点お手許の大会選句集を見ても明らかなように、その成果は毎年上っている。」

続いて、大会委員長の岸風三楼理事から大会募集句の審査経過報告を行う。「今回の作品応募は今までの最高であり、三二二〇組、一万六一〇〇句に及んだ。六月中旬、この予選を行い、秋元不死男、大野林火、安住敦、有働亨、加倉井秋を、草間時彦、角川源義、香西照雄、沢木欣一、福田蓼汀、松崎鉄之介、皆吉爽雨、能村登四郎、岸風三楼の十四名が予選に当った。その結果、五分の一の作品が予選を通過し、本選者二十八名に送付された。本選の結果は、選句集所載の通りである。なお、今回から全国俳句大会賞朝日新聞社賞に加えて、文部大臣奨励賞が贈られることになったことを報告する。」

（講演中の荒垣秀雄氏）

このあと、会は進んで講演に入り、角川源義氏の講演は「俳句雑感」と題し、中年からの俳句入門に触れ、六十の手習における作句心得を述べて、聴衆の心を引く。続いて、荒垣秀雄氏の講演は「自然と人間」。自然と人間との深いかかわり合いを事例を挙げて説きほぐし、自然保護三つの提言をあげて話を結ぶ。

小憩ののち、大会募集句について、山口青邨、皆吉爽雨、福田蓼汀、沢木欣一の各氏からそれぞれ特選三句について懇切明解な鑑賞批評が行われる。そのあと、賞品授与に移り、今日の栄ある受賞者六氏に対し、文部大臣、朝日新聞社および俳人協会からそれぞれ授賞が行われた。ついで、各選者の特選句に対し一人一人賞品の授与があった。最後に、当日募集一句を各選者が立って、順次自ら披講する。松本旭、井沢正江、加倉井秋を、古賀まり子、篠田悌二郎、成瀬桜桃子の各選者であり、おのおの特選一句、普通選十句を選んだ。

終って松崎鉄之介理事から簡潔な閉会の辞があり、かくして第十三回全国俳句大会は万事滞りなく全日程を終え、万雷の拍手の裡に、その幕を閉じた。

なお、今後、各賞、特選句入選者のうち、遠来の方々を中心に懇親会が、席を移して森永製菓食堂で行われ、入選者ともども立ち上っての挨拶になごやかな一刻を過した。

（山崎ひさを）

第13回全国俳句大会

受賞・特選作品集

全国大会賞・朝日新聞社賞

やどかりの山の祭に来て売らる　庵　達雄

全国大会賞・文部大臣奨励賞

縋るものなき大屋根に雪下ろし　馬場　会子

全国大会賞

焼く鱧の匂へる京の通し土間　松本真一郎

水盗み黒き富岳を怖れけり　市川多津美

老いてみんなちちははに似て盆に逢ふ　原本　松旺

早苗饗や父が酌して母が酔ふ　林　毒芽

――選者特選作品（順不同）――

水原秋桜子選

初夢を忘れ四十路のはじまりぬ　吉川　玲子

やどかりの山の祭に来て売らる　庵　達雄

白地着て火山灰降る外出ためらひつ　佐藤　瑠璃

富安　風生選

緑蔭や信じて人に蹤いてゆく　井筒キクエ

天平の空より降りし雲雀かな　西林　始

早苗饗や父が酌して母が酔ふ　林　毒芽

阿波野青畝選

紙漉くや背山の雪に励まされ　今岡　碧露

老いてみんなちちははに似て盆に逢ふ　原本　松旺

山の影次々たたみ冬日入る　川島　志げ

野村　喜舟選

塩吹きし山着も脱がず蚊火を焚く　阿部北瞰子

花衣疲れし如くかかりをり　嶋田　正次

麦の秋身欠き鰊を煮る匂ひ　古宮　三郷

山口　青邨選

街空に海猫を誘へる雪解川　森田正世史

羽抜鶏島の銀座を疾走す　尾崎　晋己

仕度まづ山を見てゐる蝮捕　佐藤　八男

山口　誓子選

縋るものなき大屋根に雪下ろし　馬場　会子

摘み尽すことなきげんげ摘みつづく　中川　淳子

手を借りて足抜きあへり深田植　宮崎　青岬

中村草田男選

黙禱の真赤な世界原爆展　吉川　柳水

過ちに似て白桃に刃を入れる　梅原　昭男

一病の夫も金婚木斛咲く　高垣　菊枝

阿部みどり女選

貨車過ぎてあらたな風や苗木市　鈴木きみえ

しろがねのうぶ毛濡れゐて今年竹　松永　珠

雪残る田に紙漉きし水落とす　栗田やすし

後藤　夜半選

退院の妻が轟く花火見る　白子　沼南

戸惑ひの眸をもち祭馬となる　山原せいぎ

うつむいて耳のやさしき田植笠　楠本　信子

中村　汀女選

月明の穂高の雪解はじまれり　本多　脩

雪嶺のぐっと近づく寄港かな　池方坊郷村

ふるさとや林檎は花を摘まれをり　古松まさ子

秋元不死男選

迷子札野遊び姿がひた隠す　北中富士子

茂吉忌と書きそふ育児日記かな　横田青天子

仏壇を出て父母遊ぶ桃霞　岩村　明河

大野　林火選

雛流す如く棒を水に置く　黒瀬　勲風

踊る輪を抜け出るときも暗きより　頭島　加安

薔薇匂ふまで車椅子寄せ合へる　増田　渕秋

安住　敦選

玉葱の髻吊るし義仲忌　北村たけし

隔てればそれだけの距離帚草　斉藤　陽子

河骨のひらく高さのありにけり　津村　典見

石川　桂郎選

鯉提げ羅の気負ひの中を出る　井戸すみを

じやがたらの花の夕ぐれは口重し　尾形不二子

白地着てあるがままあり今日暮るる　薄木千代子

石塚　友二選

矮鶏の子のひとつが雉子に変りけり　藤原　如水

囀りに覚めて吾家の梁太し　宮坂　八雪

花種を播き善隣と垣結はず　佐藤　清次

有働　亨選

青空の落ち込み来たる竹を伐る　成松義三郎

萱刈るや向ひの山も萱を刈る　柳　清十

僧のみの観桜の宴影に似て　岩村　明河

遠藤　梧逸選

鳥獣に向きて涅槃をし給へり　野田　郁子

過ちに似て白桃に刃を入れる　梅原　昭男

走馬灯めぐれば何時か幸あらむ　桜井　ふみ

加倉井秋を選

浄闇の雪鶴装の和布刈禰宜　久保　晴

鶴の白借りて明けゆく鶴の里　井手　直

母死後の四隅反りたる籾莚　網代錦泉子

角川　源義選

むつきたたむは鶴折るに似る日和かな　二町　睦子

椎若葉鳩共波郷の兵舎朽つ　木村　川至

早苗饗や星も降り来て田に集ふ　安養寺美人

岸　風三楼選

鉾番に一睡たりと許されず　竹原　梢梧

踊る輪を抜け出るときも暗きより　頭島　如安

大杉を神降り給ふ神楽笛　高原　千景

草間　時彦選

白墨をよく折る教師リラの花　国持　節子
初夢を忘れ四十路のはじまりぬ　吉川　玲子
白地着て火山灰降る外出ためらひつ　佐藤　瑠璃

香西　照雄選

蕨狩固き舗道に出てしまふ　山畑　一翠
口笛もて少年野火を促せり　山之内喜七
蟻地獄昏れて外とは別の闇　長岐　靖朗

沢木　欣一選

茶摘女の藁の上なる昼寝かな　吉良ゆき子
足洗ひ浄めて鵜匠舟に乗る　竹原　梢梧
大釜の鉄の匂ひや田植どき　小松　信子

能村登四郎選

父の日や杉美しき山境　伊与　幽峰
火より火を奪ひて野火の拡がれり　日下　小波
透きとほる火のさくら色干鱈裂く　神山由紀子

平畑　静塔選

一糸よりはじまる毛絲編みはじむ　本宮　鼎三
遍路来て吾より軽く磴のぼる　二宮みつる
鳥獣に向きて涅槃をし給へり　野田　郁子

福田　蓼汀選

焼く鰻の匂へる京の通し土間　松本真一郎
枯蘆の中一戸への水路あり　竹原　梢梧
縋るものなき大屋根に雪下ろし　馬場　会子

松崎鉄之介選

梅漬けて母の歳月飾りなし　大久保隆規
焼く鰻の匂へる京の通し土間　松本真一郎
水盗み黒き富岳を怖れけり　市川多津美

皆吉　爽雨選

ためらはず海女に倣ひて踊るべし　浅野　敏子
分校の遠足春の川渉る　松本　秀司
老いてみんなちちははに似て盆に逢ふ　原本　松旺

岐阜懇親吟会特選集

秋元不死男特選

休め鵜のあらぬかた向く秋の風　相沢有理子

森田　峠特選

城高し秋蟬これを讃へ鳴く　宇佐美高秋

有働　亨特選

いきなりの鼻孔や大仏暑におはす　大野きよ子

沢田　緑生特選

かまつかや光にさとく餌を待つ鵜　服部鹿頭矢

近藤　一鴻特選

数珠玉に一粒の露子規忌来る　押川　君枝

薄　多久雄特選

秋日照雨国盗り直後めぐ寺に　鈴木飛鳥女

太田　嗟特選

鵜飼舟闇をもどれる櫓音なり　衣川　砂生

大洞　真砂特選

藤の実の長く短かくドレミファソ　岡田　昇玉

――大会当日募集句特選（順不同）――

古賀まり子選

鳴きとほすための高さに法師蟬　池田　秀水

加倉井秋を選

芦火消えそれきり音の絶えにけり　小井戸春宵

篠田悌二郎選

いなづまやふたりの母の家具遺り　大久保隆規

井沢　正江選

神も扉をとざす厄日を詣でけり　出縄　コウ

松本　旭選

かくも汗して母ほども働かず　山田　諒子

成瀬桜桃子選

秋風を聴く囮鴨首そろへ　藤井　晴子

所　山花特選

鵜簗も都あかりの露けき火　山田　箕好

自然に親しむ会入選集

阿波野青畝選

臥す鹿に秋草描きしごとく添ふ　森田　峠
ぬばたまの実といふ晴るる日の黒さ　後藤比奈夫
寄りて咲く思ひ草とはしきやし　小林　生乃
（選者受賞を遠慮願って小林さんに決定）

磯野　莞人選

ぬば玉のこぼれて土にまぎれけり　由井　艶子

右城　暮石選

画布をひつかきて紅葉のとびにけり　長井　貝泡

大橋　敦子選

鶏頭の万葉以来この紅さ　塩川　雄三

亀井　糸游選

足とめてゆかしむちちろ末枯るる　久下　史石

後藤比奈夫選

色鳥の竹柏の隙間をこぼれけり　栗山　渓村

下村　非文選

標なる歌は憶良ぞ実かづら　松本　透水

堀内　薫選

横向きて咲く思ひ草見つかりし　今井風狂子

森田　峠選

八一歌碑見よと背高の萩括る　前川　菁道

山本　古瓢選

切角株神鹿の歩となりにけり　猪股千代香

沢田弦四朗選

思ひ草さがすと蝶を翔たせけり　岩崎　三栄

白墨をよく折る教師リラの花　国持　節子
初夢を忘れ四十路のはじまりぬ　吉川　玲子
白地着て火山灰降る外出ためらひつ　佐藤　瑠璃

香西　照雄選

蕨狩固き舗道に出てしまふ　山畑　一翠
口笛もて少年野火を促せり　山之内喜七
蟻地獄昏れて外とは別の闇　長岐　靖朗

沢木　欣一選

茶摘女の藁の上なる昼寝かな　吉良ゆき子
足洗ひ浄めて鵜匠舟に乗る　竹原　梢梧
大釜の鉄の匂ひや田植どき　小松　信子

能村登四郎選

父の日や杉美しき山境　伊与　幽峰
火より火を奪ひて野火の拡がれり　日下　小波
透きとほる火のさくら色干鱈裂く　神山由紀子

平畑　静塔選

一糸よりはじまる毛絲編みはじむ　本宮　鼎三
遍路来て吾より軽く磴のぼる　二宮みつる
鳥獣に向きて涅槃をし給へり　野田　郁子

福田　蓼汀選

焼く鰻の匂へる京の通し土間　松本真一郎
枯蘆の中一戸への水路あり　竹原　梢梧
縋るものなき大屋根に雪下ろし　馬場　会子

松崎鉄之介選

梅漬けて母の歳月飾りなし　大久保隆規
焼く鰻の匂へる京の通し土間　松本真一郎
水盗み黒き富岳を怖れけり　市川多津美

皆吉　爽雨選

ためらはず海女に倣ひて踊るべし　浅野　敏子
分校の遠足春の川渉る　松本　秀司
老いてみんなちちははに似て盆に逢ふ　原本　松旺

岐阜懇親吟会特選集

秋元不死男特選

休め鵜のあらぬかた向く秋の風　相沢有理子

森田　峠特選

城高し秋蟬これを讃へ鳴く　宇佐美高秋

有働　亨特選

いきなりの鼻孔や大仏暑におはす　大野きよ子

沢田　緑生特選

かまつかや光にさとく餌を待つ鵜　服部鹿頭矢

近藤　一鴻特選

数珠玉に一粒の露子規忌来る　押川　君枝

薄　多久雄特選

秋日照雨国盗り直後めぐ寺に　鈴木飛鳥女

太田　嗟特選

鵜飼舟闇をもどれる櫓音なり　衣川　砂生

大洞　真砂特選

藤の実の長く短かくドレミファソ　岡田　昇玉

――大会当日募集句特選（順不同）――

古賀まり子選

鳴きとほすための高さに法師蟬　池田　秀水

加倉井秋を選

芦火消えそれきり音の絶えにけり　小井戸春宵

篠田悌二郎選

いなづまやふたりの母の家具遺り　大久保隆規

井沢　正江選

神も扉をとざす厄日を詣でけり　出縄　コウ

松本　旭選

かくも汗して母ほども働かず　山田　諒子

成瀬桜桃子選

秋風を聴く囮鴨首そろへ　藤井　晴子

所　山花特選

鵜簗も都あかりの露けき火　山田　箕好

自然に親しむ会入選集

阿波野青畝選

臥す鹿に秋草描きしごとく添ふ　森田　峠
ぬばたまの実といふ晴るる日の黒さ　後藤比奈夫
寄りて咲く思ひ草とはしきやし　小林　生乃
（選者受賞を遠慮願って小林さんに決定）

磯野　莞人選

ぬば玉のこぼれて土にまぎれけり　由井　艶子

右城　暮石選

画布をひつかきて紅葉のとびにけり　長井　貝泡

大橋　敦子選

鶏頭の万葉以来この紅さ　塩川　雄三

亀井　糸游選

足とめてゆかしむちちろ末枯るる　久下　史石

後藤比奈夫選

色鳥の竹柏の隙間をこぼれけり　栗山　渓村

下村　非文選

標なる歌は憶良ぞ実かづら　松本　透水

堀内　薫選

横向きて咲く思ひ草見つかりし　今井風狂子

森田　峠選

八一歌碑見よと背高の萩括る　前川　菁道

山本　古瓢選

切角株神鹿の歩となりにけり　猪股千代香

沢田弦四朗選

思ひ草さがすと蝶を翔たせけり　岩崎　三栄